

と想っていた矢先のこと。可哀相です。朝夕、冥福を祈ってやることしか、尽くしてやることもありません。

私も数えて見れば既に八十歳を超えました。地区老人クラブの会長として、地区の会員と仲良く楽しく暮せるよう、心掛けています。

また恩欠連（軍人軍属恩給欠格者連盟）の村の支部長を命ぜられて、亡き戦友、物故会員の冥福を祈るばかりです。

日本よ！ われ我が南の果てで死闘を尽くした、あの労苦を時々思い起こして、一等国としてますます繁栄し、世界平和に貢献することを誓うものです。

南方戦線を転戦して

愛知県 伊藤 政一

昭和十五（一九四〇）年、徴兵検査にて「第三

乙種」と判定され、補充兵としての資格となった。私は、伊藤家の三男として生まれ、洋服店を営んでいましたので、他家の洋服店で、洋服の仕立て職人の修業をしておりました。

昭和十二年と十五年ともなると支那事変が拡大され、あちらこちらの予備役の方々、あるいは補充兵の方々にも召集令状が来て、町内を挙げて「祝出征」と書いた旗や幟を立てて、駅まで見送って、門出を祝ったのであったが、その後、戦局も厳しくなり、男子の誰もが出征するのが当然のようになり、前のような華やかな見送り風景はなくなつて、近親の方々による出征祝のみの様相となった。

私は第三乙種の補充兵なので何となく肩身がせまく感じていた。友人達は堂々と甲種合格で現役入営、第一、第二の補充兵となった方々も、令状が来て帝国軍人として出征しているのにと、そんな気持ちでいた時、昭和十六年十月、いよいよ私の所にも召集令状の赤紙が来た。これで私も皆と

同等の軍人としての務めができるようになったのだ、と思った。

しかし、よくよく令状の内容を読んで見ると、十月五日、静岡県三島市中部第十部隊入隊（九十日間の教育）と限定された、いわゆる教育召集令状であった。中部第十部隊へ入隊、三カ月間の基本教育（一期検閲）を受け、明けて昭和十七年一月二十八日、除隊となった。

同級生達は満州、朝鮮、支那大陸あるいは南方戦線へと派遣されて、砲煙、弾雨の中を苦闘していることを思うと申し訳ない気持ちで、一応除隊をし懐かしい我が家に帰ったのだった。そしてまた、今まで勤めていた洋服屋に、仕立て職員として働いていた。

日に日に戦況は拡大され、終わるとも知れず、補充兵の方々も三人、五人と出征して行くようになった。

翌昭和十八年一月十日、二度目の令状にて、元

の中部第十部隊に入隊、こんどは愈々本物の実戦要員として野戦重砲第四連隊に転属となった。そしてここで第一線で活躍しなければならぬ重砲の訓練を三カ月間行い、何とか射ち方から砲の搬送、弾薬の運搬等の教育を受け、私共は南方戦線行きと決まっていたようだ。

この頃ともなると、南方戦線の戦況は酷しくなり、各島々に駐留していた日本軍は至る島々で苦戦をし、玉砕した島もあった。また敵の上陸によつて、島の山岳地帯の奥へ奥へと追いやられたとか、種々悪い情報が續いて聞かされるようになり、快い気持ちではなかった。

しかしこれも軍の命令となれば致し方ない。我が身は第三乙種の補充兵ではあつても、ここに来ては甲種合格でも第一、第二補充兵でも何ら変わりはない。国のため、陛下のために、この身は捧げたものだと自分自身に言い聞かせて、その日の来るのを待っているといった心境であつた。

いよいよ同年四月十日、命令が伝達された。

我々野戦重砲隊は馬匹と共に宇品港より、民間から借りたという五千トン級の船に乗船した。船団は六隻だと思ふ。敵の攻撃を避けるため午後六時頃出航、この夜は今にも降り出して来るような真つ暗な夜だったようだ。甲板には対空、対潜監視の歩哨を立てて置くのだが、一寸先も見えない真つ暗闇のため、恐らく、それらを見分ける事はできない状況であった。

いつどんな事態が起こるか判らないので、気をゆるめる訳にはいかない。船団はどこへ行くのか、その行先は私共には知らされていない。ただ南方の島に行くのだとは聞かされていた。暗い海原を航行し、やがて島が見えて来た。各兵隊達は「もう南方の島へ着いたのか」、敵潜水艦にも、空からの攻撃も受けずに、無事着いたのかと勝手に想像しながら、やがて寄港したのは台湾の高雄だと言う。

「何だ、まだ台湾か」これからが大変だと皆大笑いした。ここで三日ほど停泊して馬糧や糧秣そ

の他の物資を補給し、再び船は南太平洋を南下して行った。情報によると、フィリピンに向かった他の船団の二隻が轟沈されたと言う。幸い我々船団は無事、ラバウルのニューブリテン島のココポに上陸することができた。

上陸後、南方派遣、沖第一五〇二部隊第一中隊第一小隊第一班に配属となった。

野戦重砲大隊本部は第一中隊及び第二中隊にて編成、弾列大隊長は古野光夫少佐であった。ここで我々の任務は米軍の上陸を阻止するための防禦線を造ることで、日夜、海岸線に陣地構築に専念した。中隊には各二門ずつの重砲が配備されており、他に歩兵独立大隊等で編成されていた。

ここニューブリテン島は目の覚めるような新緑の林、深く澄みきったきれいな海で、いろいろな美しい魚が泳いでいる。全く夢の国へ来たような感じさえ思った。しかし、日本と違ってさすが赤道直下の暑さはじつとしていても下着は汗だくと

なる。その暑さの中での陣地構築は一苦勞であった。た。

午前十一時頃だと思う、空襲というサイレンがけたたましく鳴った。敵のB 24爆撃機三機が来襲。今まで汗だくで造った陣地は跡形もなく破壊され、もうもうと土煙が上がっている。その間約一時間、敵機は予定の爆撃が終わったのか遙か南の空に飛び去っていった。

「異状の有無点検」と言うことで点検に入ったら、友軍の火器は林の中に遮蔽して置いてあったので難をのがれたが、戦友の八島君と高木君そして田代君の同年兵が爆撃で吹き飛ばされてしまった。その他十人位の戦友が戦死してしまった。林の枝に肉片や衣服がぶら下がっているが誰彼のものかも見分けできなくなってしまった。また異状の有無点検で生存が確認できないので、やられたと断定したのもありました。

このような空襲は数回にわたって繰り返され、我が軍の陣地構築を妨害し、ある時はロッキード

による空からの銃撃が相次いだ日々であった。戦争さえ無かつたらこの世の楽園であるものを、と誰もが思ったことであろう。

このような生活を約一年程で、部隊はシヨートランド島という島へ転進することになった。

野戦重砲となると重量が九六式牽引車共で約六トンもあり、道路のぬかるるところなどは進行に難渋するので、運搬可能にするため、まずは道路造成作業を行う必要があったようだ。そしてシヨートランド島に転進するには、敵潜水艦の魚雷が待っているとの情報が知れ渡っていたので気が気でない。

この頃、比島方面では、各島々には米軍が上陸、我が軍は死闘を重ねているとの情報があり、我々も途中敵潜水艦の魚雷に見舞われるのかと思うと、今度の転進がこの世の終わりになるのではと覚悟をきめていた。でも我々の船には我が海軍の駆逐艦が護衛に付いてくれたので心配した程で

なく、無事シヨートランド島へ上陸することができた。

早速、各隊はそれぞれの分担で使役に着き、自分は砲の荷揚げをした。ある者は弾薬の荷揚げ、その他の荷物の全部の荷揚げの終わった頃は夕方になった。真つ赤な太陽が海の彼方に沈んで行く。ああ今日一日も何とか生き延びたかと夕飯の準備へと取りかかる。転進々々で、日本からの米等の補給はないので食糧事情が悪化し、現地にある物を食料としなければならぬ。

そこで部隊長命令で、原野を開墾して畑を造り、サツマ芋を植えて食糧とするということになった。当日は携行品で夕食を取り、明日からその作業に就くようにとの命令が伝達された。そして、部隊長は自ら畑に行つて植え方やら畝巾等まで指示をする「物資利用五訓」を命令した。

「物資利用五訓」

(一) 畝巾は一メートル、植え方は舟底形とする
こと、と言う。そして、さし苗は現地の住民

の、さつま芋の蔓を切つて来て、さした。

(二) 椰子筍の利用 椰子の葉の真中のやわらかい所が食用となった。

(三) 澱粉工場 鬼椰子(ニツパ椰子)の幹から取れる。

(四) 塩工場 海岸で海水をドラム缶に入れて煮詰めて水分を蒸発させると、多少黒色な塩ができた。

しかし、これは風が無い時には、煙が空に昇り、敵機の目標となるので、なるべく風の強い日でないといふ危険であった。

(五) 食油工場 椰子の実を割ると中に椰子水があつてその水の周りにコプラという柔らかい果皮肉がある。これをすり卸して煮詰めると食油ができる。

このように部隊長は、現地物資を加工利用して生活できるように、この「物資利用五訓」を指示したのでした。

また、魚介取り班なるものも編成して、森林の

大木を切つてカヌーを造り、いろいろな方法で魚介を獲る。この当番に当たつた時は、本隊と離れた作業なので楽しい思い出もあった。

こうして兵隊達の栄養源としたものでした。

食べ物のことが先になつたが、我々の任務は先にも述べたように、重火器を運搬するための道路造りだが、山林を伐材して直径三〇センチ位の丸太を並べて結束し、六トンもある重車輛が通れるように木材の舗装道路とでもいうか、その上を野戦重砲車輛を進行させていったのでした。

私達は歩兵の方のように第一線で突撃をしたり、敵前での戦闘は一度もなく、ただ空襲による攻撃はあつたけれども、幸い無事に足掛け四年間の南の島での生活は、割と充実した暮らしができたと思う。

そんな時、今度はブーゲンビル転進の命令が下達され、私は輸送隊の任務に就くこととなつた。

この島の生活も今日で終わりかと、日が暮れてか

ら、さつま芋と芋の葉と一緒に煮て親子丼として食べ、ショートランド島最後の眠りに着いた。

翌朝は、いよいよ転進であるので、朝食食用にさつま芋をふかして携行することとし、空き地の所に整列し、出発の訓辞があるのではと思つて、隊長の来るのを待つていた。整列した我々全員は、今日までは生きのびたが、今度行くブーゲンビルへは、行く途中、今までのように敵潜水艦にも見舞われず無血上陸ができるだろうか、そして上陸した後、米軍の攻撃で勝てるだろうか、こんな想いを皆持つていたのではないだろうか。

そんな気持で部隊長を待つていた時、その部隊長はなんとなく元氣のない様子で真中の台に上がつて、終戦の詔書を読みあげたのだった。

隊長の声はだんだんと小さくなり、目には涙がいつぱいで、並みいる兵隊達もどつとばかりにどよめきが起こり無条件降伏となつた無念さ、何のために今日まで苦勞を耐えて来たのか、と皆同じ想いで号泣したのだった。そして、我々は今後ど

うなるのだろうか、いろいろな「デマ」も飛びま
した。

その夜は不安で、まんじりともしない一夜を過
ごし、翌日宿舎の前の広場に全員整列しました。

そして武装解除となり、ファール島という無人島
へ集結させられ、ここで捕虜生活となりました。

食糧は今までの自給自足のさつま芋等でなく、米
飯食やパン等の支給があり、食べ物には不足のな
い状況となったが、無人島なので、毎日、この
道路造り等の使役に狩り出された。

監視をしているのは、オーストラリア兵だった
ので我々捕虜に対しては割と無茶な事は言わな
かったし、また暴力等はしなかった。ただ赤道直
下の南海の無人島の八月といえば暑い。でも日本
のような湿気がないので木陰に入れば涼風が吹
き、汗ばんだ体を癒してくれる。こんな日々を送
り、一生この無人島で暮らして行かなければなら
ないのだろうかと思っただけではなかった
であろう。ただ困ったことにはマラリアに罹った

病人の手当てが大変で、高熱と悪寒と震えて、
我々はただ見ているだけでどうすることもできな
かった。布団や毛布がある訳でなし、ただ戦友の
苦しむ姿を見守っていたのだった。

この無人島へ来て何日経ったであろう。今日は
何月何日なのか曜日さえ判らない。そして我々に
運があつたのか、遂に日本に帰れるという命令が
伝達された。部隊はそれぞれ隊伍を整え、約半年
以上の無人島ファール島の捕虜生活ともお別れ
し、小さな船着場に向かつて行進して行った。木
立の葉蔭から海が見えて来た。よく見ると洋上に
日本の頼もしい空母の姿が見えた。あの空母に乗
船するのだと言う。こちらに来る時は、民間から
借り受けたという借り物船だったのに、今度帰
りは軍艦、しかも航空母艦で帰れるとは、夢にも思
わなかったことである。我々は小さな船で沖の母
艦へと乗り移った。

今日まで幾多の戦友が、ある時は爆撃で、ある

時は敵機の機銃掃射で、あるいは病気で亡くなった幾多の戦友を南海の島々に残し、我々は無事故国に帰る事ができるのには、なんとなく後髪引かれる思いで、復員船の人となる。

やがて幾日かの航海である。今は敵の潜水艦、敵機の襲撃もなく、我れ先に故国日本の島を見ようと、皆甲板に出て、甲板は兵隊でいっぱいだった。そのうち誰かが「あっ！ あれは富士山だ」と叫んだので「どれどれ」と前方の指差す方を見つめると、間違いなく富士山の姿だ。

「国破れて 山河在り」富士の姿は破れていなかった。久里浜に上陸、檢疫を受けた後、互いに戦友たちと「元気でな、また会おうぜ」と別れを告げ合い、それぞれの郷里に向かって車上の人となった。

「国破れて 山河在り」とは言え、列車の窓から見える都市の姿は、誠に見る影も無い焼野原と化していた。名古屋も焦土と化し、生家の豊橋もかなりやられて、焼け残った建物は、あちこちに

ぼつりぼつりと見えるだけ、無論実家は焼かれ疎開していると言う。

家族のいる所を尋ねて、約四年ぶりで無事帰還できたことを、皆と手を取り合って喜んだのだった。

その後、我が国も徐々に復興の兆しが進んで、自分も元の洋服仕立て職人として働き、現在は伊藤洋服店を経営しております。

あれから、六十数年経った今、じつと眼を閉じてあの頃の事を想うと、次から次と、ビデオでも見ているように目に浮かんで来ます。あの時、尊い生命を無くした幾多の戦友の顔が「おい伊藤！ 元気でいるか」と夢の中に出て来ます。心から安らかなれと、ご冥福をお祈りしております。合掌